

Les amis de l'orgue avec basse d'archet et basse chiffree (仮称)

アンサンブル練習風景公開のご案内

2006年 8月7日

小中学生の皆さん、あるいはアンサンブル、チェロ、ヴィオラ・ダ・ガンバ、鍵盤楽器によるコンティヌオに興味をお持ちの方へ

今まで、第4日曜日に主に17世紀の器楽アンサンブルの練習をしておりましたが、小中学生の皆さん、あるいは、アンサンブルに興味のある方、チェロやチェンバロ、オルガン等でのコンティヌオ初學者の方々へのご参考になる様、アンサンブル練習風景を公開する事としました。お気軽にご見学あるいはご聴講下さいます様、案内申し上げます。

日時 9月10日(日) コーチ 千成千徳 pm 2:30 ~ pm 5:30

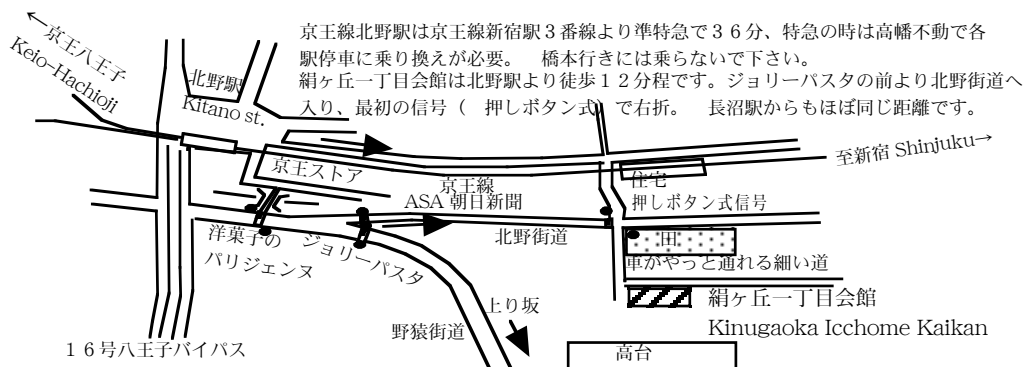
於 絹ヶ丘一丁目会館 見学、聴講、無料。

曲目 Dietrich Buxtehude 1637? - 1707 Trio sonata III opera prima 1696
Dietrich Buxtehude Ciacona in e BuxWV 160 (7/23)
Antoine Dornel ca.1680 ~ 1765 sonates a violon seul
Dario Castello Sonata Concertante Libro Secondo Sonata decima (9/10)
Jean-Marie Leclair Ouvertures et sonates en trio op.13 Sonate I D dur (9/10)
等

編成 violino viola da gamba violoncello clavicembalo italiano (別紙に説明あり) organo 等
(変更になる場合があります。)

入退場自由 上記練習時間内、いつでも入退場して頂いてかまいません。

予約は不要ですが、町内会館使用のため、町内での止むを得ない事情により、中止となる場合があります。万一の場合に、電話等でご連絡したいと存じます。事前にお電話またはファックス等頂けますと幸いです。



ご案内まで
山野辺曉彦

tel/fax 042-635-3784

〒192-0912 八王子市絹ヶ丘1-38-1

～～ 今回使用しますイタリアンチェンバロについて、今、分かっている範囲で説明してみます。～～

この楽器は20世紀にイギリスで発見されました。その時はすでに鍵盤は無く、響板も低音側の半分はありませんでした。これを1950年代に Hugh Gough によって、また、2000年には Alan Gotto によって修復され、イギリスでコンサート等に用いられました。2005年に日本に到着し、今年、宮城県のチェンバロ製作家、木村雅雄さんの元で、よりオリジナルに近い状態に再度、修復がなされています。この修復では、ジャックと呼ばれる弦を弾く部分を、なしの木でヒストリカルな物に作り直し、また、2列あるジャックには鳥の羽より削ったつめを用います。また、鍵盤の各キーの軽量化が計られます。その2列のレジスターは日本への到着時 8 foot x 2 となっており、この仕様はそのまましました。

この楽器のネームボードには Vincentius Pratensis IDLXXXXIII と書かれています。作者名のところは普通のイタリア語にすれば、Vincenzo da Prato です。プラートはフィレンツェの近くの町ですが、プラートのヴィンチェンツォという意味です。残っていた高音側の響板には 8 foot 2 列分のブリッジピンがありますが、レストプランク（チューニングピンが打ち込まれる厚手の木）には 4 foot（1 オクターブ高い）と思われるチューニングピンの穴の列があり、一時 8 foot + 4 foot の楽器であったと思われます。音域は C/E ~ f3 となっています。底板、響板、鍵盤、およびアウターケースはイギリスで修復時に付加されたものです。スパイン、ベントサイド、チーク、テール等の側板はとても古いものの様に見えます。なお、チークやベントサイドの厚みは 3mm ほどしか無く、堅い針葉樹が用いられている様です。全長 193cm と小ぶりですが、高い倍音を多く含み、豊かに鳴る様な気がします。

（イギリスでの最初の修復時に取り除かれた、響板の高音部分とボックススライドの一部も楽器と一緒にイギリスから送られて来ました。）